

十五周年大会を基調として

大会

我等の光明団創立十五周年大会は、約五十名の中堅純正光明団々員の、求道猛精進を通して終りをつげた。

我等はいよいよこの大会をして、歩みを内へくと専らならしめることによつて、強度一死団結と、自己自身の教化耕養の深刻化に於いて、十分の成果を約め得たことを喜ぶ。

憶うに五周年大会は、発生地飯室において未曾有の大盛会をもつて行われた。そしてそれが直ちに団が大飛躍と苦難を荷負うべき重要な役割を果たした。団が一村一郡の問題でなくて、教界に於ける重き役割を背負つたのは、この五周年大会を通してであつた。

十周年大会は広島市に於いて挙行せられ、市の一般大衆に働きかけるための大会であつた。

しかし、この度の十五周年大会は、全く、内へくの進路をとつた。この点過去の何れの大会よりも静かであり、少人数であつたけれども、しかし過去の如何なる大会よりも有意義であつたことを確信する。

我等はこの五日間の大会において、あらゆる不純分と、不真面目と、遊惰とを超克し、駆逐しつつ氷雪の寒冷に頭を練り、白熱の溶鉱炉に信の願意を尖鋭化し、明確な論理に腹を造り、やがて、春風駘蕩裏に一味一体を現証し、尊嚴霜の如き義によつて一死団結を誓つた。

基調

我等の歩みは十五年続いた。続いてここまで来た。この大会こそ全団同士の総意を反映するものであり、光明団自体の正体を如実に顕現せるものであつた。この大会こそ、一面過去の団の歩みを清算するものであり、一面将来への躍進飛躍の第一歩を画する一大基調をなすものであつた。

憶うに団は、ここ二三年来、極めて歩みを闡明にした。あらゆる妥協と反仏教的な一切を排撃しつつ、団自体の歩みを、大乘仏教の真髓の發揮そのものたらしめようとするに至つた。しかし社会の物質的窮迫の現状は、社会をしていよく非大乘的、非仏教的、反無我的ならしめた。而してかかる情勢は、一面、仏教者の歩みを明確ならしめた。特にかかる社会情勢は、真実ならざるあるものを打倒すべき大地の声も自然に発生せしめた。我等は、鋭い大乘の剣が、かつては大乘それ自身の具体的顕現であつた既成宗団の上に向けられている現状を悲しむものである。しかしながら、生命の枯れんとする既成宗教の更生せんことを切念するものである。もしその社会的文化的意義を果すべき改進をとげるならば、寺院自体の本来の使命は輝くであろう。我等はここに特に団の運動に参加せる寺院僧侶諸賢に尊重なる敬意を捧げると共に、十五周年大会に当つて、団の新進中堅隊として僧分の諸賢を得たることを特筆すべきである。一歩も躊躇かざるこれら中堅除は、たとえ餓死するとも祖師の歩武を生活すべ

く、社会のあらゆる階級層をして大乘精神を承認せしめずばやまざるべし。十五周年大会こそ、真に将来への一大基調である。

学仏道場

更に我等にとつての飛躍を必然ならしめるものは新本部の建設である。六間に十三間の総二階、七十五畳敷の講堂をはじめ、印刷部、本部員の居室十室を有する新館は、棟梁柳川富太郎氏の全くの義侠、献身的努力によつて成就した。本部の求めない以上に、注意設計、設備に犠牲を払い、全く算盤をはなれて、本団の精神を汲み、信を余が上におき、この工事を急いだ。不幸、幾度の支障のため大会に間に合わなかつたけれども、不日、本部はこの新館に移転せられるであろう。更に団員、吉見又一氏は、唯一人建設委員に任じ、自己の職をなげうち、東奔西走遂に新築を全うした。世間普通、一寺院の建設に時に幾十人の役員をあげ、徒らなる喧騒の中に事が運ばれ、金品の半ばその酒食に費されるに對し、唯一人の委員によつて成されたること、実に光明团的である。ここに厚く二氏に深謝の意を捧げる。

憶うに、新本部は普通世間の家に非ず。会社にあらず、旅館合宿所に非ず、家であると共に学仏道場であり、同胞の家であり、団運動の根源地である。我等本部員はここに移ると共に、規律において、嚴肅秋霜の如く、温かさにおいて春の如き生活を成就すべきことを誓つた。

日を追い、月を追い、年を経て、我等の願望はここに成就せらるであろう。

2

同胞に檄す

輕薄、笑うべし。

愚劣、排斥すべし。

狂氣、哀れむべし。

猪突、誠むべし。

大信大行によつて一体血盟、もし輕薄ならば輕薄も亦可なり、全身全靈を大法に捧げ、永世を願力に乗托して余念なきもの。愚劣なれば愚劣も亦厭わず、大愚大悪の自証は、仏家諸聖の常途である。余等ここに達せざるを悲しむ。地位に非ず、名にあらざ、人間の幸福に非ず、人生の尊嚴と歡喜は、唯、使命の成就にあることを信じて生活する者、狂氣ならば狂氣も亦求むる所。静かなること林の如き肅々たる行歩は、彼岸への一道をとつて動かず、何ものをも超えて必勝の大道に精進すること、もし猪突ならば猪突も亦やむを得ず。

もし批判せんとするならば、この行歩に加わりてこれをなせ、傍觀者の百万言、これを無視して可なり。生活せず、行歩せずして、使命の重き荷をおき、列外に去る者に言訳がある。純正光明団々員に、一言の弁解許されず。如何なる時にも、処にも、使命發揮の行歩あれ。信は人生隱遁者の風流や趣味の一種ではあり得ない。

されば我が同胞よ。

一、何れの仏教者よりも、真理に對して忠順であれ。師教に對して忠実であれ。

一、何れの仏教者よりも、求道に熱烈であれ、教えに対して深い理解力と選択の眼を持て。

一、何れの仏教者よりも、自己自身を内面的に深く培へ。

一、何れの仏教者よりも、静かであれ。

一、何れの仏教者よりも、社会に働きかけるのに強力であれ。

一、何れの団体よりも固い団結をたもて。

一、何れの団体よりも相互援助の実を挙げよ。

以上七ヶ条こそ、我が光明団の実現すべき金候である。

我等はここに十五周年に当って同胞と共にこの歡びと栄光を分ち、いよく所期の使命を達成せんとして、この一文を草して同胞に捧げて敢て激励するものである。

（昭和八年十二月七日）